

## 悩める商社マン

中村 アキヤ

某商事会社の事業本部で東南アジア進出の戦略会議が予定されていた。将来に向けての拠点選びが主な議題で、各国の駐在員と本社の担当者がシンガポールに九月二十三日に集合して、予想される問題点についての意見交換をするのが主な目的である。

本社からの出席予定者は資料万端の準備を終えたが、出発日に出くわすであろう台風の進路に神経をとがらせていた。

今夏は降雨の少なかった関東地方の山岳地方にも最近慈雨ともいえる降雨があり、干上がったダムの水不足に悩んでいた関係者は愁眉をひらいたところであったが、秋になって発生した台風十七号は既に鹿児島地方を暴風圏に巻き込み東海地方に豪雨をもたらしている最中であった。

出張を控えた各人とも台風接近に伴う不安を共有していたが、それとは別に各人それぞれの個人的不安を抱えていたのも事実であった。

営業課長の井上の場合にはパスポートの有効期限に関するものであった。井上は会議の二日前の九月二十日にシンガポールに飛び、一泊して翌日インドネシアのジャカルタの客先に挨拶して継続中の商談を纏め上げた上九月二十二日にシンガポールにとって返し、二十三日からの戦略会議に臨もうという腹積りだった。

ところが飛行機のチケットを購入する段になって、痩せ型美人秘書の田島洋子が泡を喰らったように飛んできて

「課長、シンガポールもインドネシアでも事情が同じなんですけど、パスポートの有効期限が六ヶ月以上ないと入国を拒否されると旅行会社がいつています。課長の場合はあと四ヶ月しかないので行く前に更新しないと駄目ですよと言われました」

「馬鹿いえ、今更そんなこといわれても、パスポートの更新をやっている時間はないよ。ちよっと両方の国の大使館に電話して本当かどうか確認しろよ。商社は情報の質が生命だから必ず裏をとるようにな」

しばらくして田島洋子が切れ長な眉を寄せて残念そうな顔をして戻ってきた。

「両方とも六ヶ月の有効期限が要るといわれました。こちらは四ヶ月の期間が残っているし、四日間で帰る予定だと現地で説明したらどうかと話したのですが、規則は規則だから現地で聞き入れてもらえるかどうか日本では保証できない。あとは現地の係官次第だと思う。とこうなんです」

「井上課長、花の商社マンがパスポートの有効期限で慌てるなんて、あまり褒められた図ではないですか？」

と声をかけたのは井上と同期の技術課長の上野だ。

「俺も、もう大分前になるが、韓国がまだ準戦時体制の頃、同じ状況になって折角着いたソウルで入国できなくて次の便で追い返されたことがあるよ。なにしろ小銃をもった兵隊に監視されながら支店に電話するやら、客先に詫びを入れるやら大変だったよ」

これを聴いて井上は不安になった。

本社の営業部長の秋山が出席する戦略会議にこんな情けない理由で出席できなかったら、会社中のモノ笑いになってしまう。

「それに…」と上野が物知り顔で忠告する。

「インドネシアはどうか判らないが、ご存知の通りシンガポールは規則に厳しい国だから、違法に入国を強行すると鞭打ちの刑に遭うかもしれないぞ、あれは本当に痛くて十回もぶたれると失神するらしいよ」

井上は、いつかアメリカ籍の少年がシンガポールで他人の自動車にエアゾールラッカーでいたずらをして鞭打の刑を宣告され、国際問題になったことを思い出した。四十歳にもなって異国の刑務所で鞭打たれるなんて考えただけでも憂鬱だった。

「鞭打ちになったかどうか分からないけど、競合会社の男が同じ理由で投獄されたが、時間がないので現地の担当者に牢屋まで来てもらって、鉄格子越しに打ち合わせをしたという武勇伝もきいたことがあるぞ」と上野は追い打ちをかけるのだった。

部長の秋山は別な問題を抱えていた。彼は以前から頻尿の傾向にあったのだが、数日前に客の接待で酒杯を重ねている際に、宴会の途中から急に尿が出なくなっただけである。頻繁に尿意を催すのだがそのたびにトイレに行っても用を達し得ないのである。

都度「失礼」と客に断わって席を立つのだが、余りの頻度に客も無視できず仲居をだしにして

「海千山千の秋山さんでも美人が傍に待ると興奮するのですかねえ？」などと氣遣ってもらうのだが、それに気の利いた返事もできないほど事態は切迫し、肉体的にも精神的にも耐えがなくなってきたのだ。

普段なら二次会にカラオケにでも行くのだが、今回は客を送り出してからタクシーで救急病院にかけつけ、「なんとか助けてくれ」と頼み込んだときは、腹部はパンパンに張って、全身が緊張し冷や汗が浮かんでいるといった調子だった。

病院の夜勤の医者は、見るからに成りたての若い女医であった。状況を一通りヒヤリングしたあと型どおり腹部を触診し

「応急措置で直ぐに楽になりますけれど、詳細は明日この病院に来て診察してもらってからになります」といって導尿の操作にかかった。

ベッドに寝かされ細いガラス製のカテーテルを尿道に差し込まれた。先端が膀胱に達する瞬間激痛が走ったが、同時に溜まっていた尿がビニール製の袋に送り出た。

「随分溜まっていましたね。辛かったですでしょう？　こんなになる前に来なければ駄目ですよ」と娘のような年頃の医者に諭されて、その夜は慥然として帰宅した。

翌日の診察の結果、病名は前立腺肥大症という典型的な老人病だと告げられた。白髪の医者がいうには

「六十歳での発症は少し早いといえますが、アルコールを摂取すると、組織が充血膨張するために尿道が圧迫されて、再び閉尿（尿が出なくなる）になる可能性があります。今後仕事との関係で酒を飲む機会が多いのなら、安心のため予め膨張した部分を削りとり、尿道を広げておいたほうが良い」

とのことで、手術の日取りまで勝手にきめられてしまった。

「先生、原因はなんでしょう？　癌になる可能性はないでしょうか？」

「原因は過度の性交とか、深酒、過労などと言われていますが、良くわかっていません。ホルモンのアンバランスからくるとも言われていますよ。そうそう、辛いものや刺激性のあるものを食べると前立腺が充血して、閉尿になる例もありますから気を付けてください」

「平気、平気。前立腺肥大なんて大したことないですよ。私の親父も女房の父親も同じ症状で手術をしました。今は外科の技術はすごく進歩しているから、なにも癌だからといって心配することはありませんよ」

秋山は昼食時に同僚の部長にちよつと話をしただけで癌を患ったことにされてしまい、いささか不愉快であった。

「私も子供の時から大きくて、医者から何度も切った方が良いといわれましたよ。今でも風邪をひくと直ぐに腫れて熱が出るのです」

「あんたそれは扁桃腺でしょ？ 前立腺は子供の時は大きくなりませんよ。風邪を引くたびに前立腺が腫れる子供なんて聞いたことはありませんよ。そういうばあさんは子供の時から爺臭かったのかもしれないなあ」

「ああ。アデノイドですか？ あれはたいしたことはありません」と請け合つたのは購買部長である。彼は前立腺と甲状腺を取り違えているのだ。

「手術ってどうやるのでしょうか？ 下腹部を切るのでしょうか？ まさか大事な部分を切断するのではないのでしょうか？」

質問したのは普段から数字にしか関心のない経理部長である。

「手足を切断した場合は義手、義足をつけるのですが、あそこを切断したら何を装着するのでしょうか？ 女性の場合はギマンといえ判りますが、男性の場合はなんとこのかな？ ギチンではおかししいし、ギロチンとでもいうのかな？」

親切ごかしにいろいろなことを言ってくれるのだが、誰の意見も参考にならなかった。

秋山はシンガポールでの会議が終わったら入院治療すべく決心した。ただ心配なことは、飛行機の中で閉尿症が起きたらどうしようかということだった。

井上課長に相談すると

「その時はC Aに頼んでストローを貰って、カテーテルの代わりにすれば問題ないですよ」

という真面目なのか冗談なのか判らない返事が返ってきた。

秋山は今回の出張に限ってアルコールは控えようと決心したのだった。

九月二十日になって台風はおおむね予定通りの進路を辿り、昼ごろには房総

半島に上陸の気配濃厚との気象庁の予報であった。

パスポートに問題を抱える井上は、鞭打ちの危険性のあるシンガポールを避けて香港経由で直接ジャカルタに飛ぶこととし、早朝五時の起床をもとめせず成田発九時三十分のキャセイ航空で時間通り曇天の成田を離陸した。

秋山部長は十一時三十分発の日本航空に間に合わせるべく、成田エクスプレスを使って九時三十分成田空港に到着し、早速チェックインを終え日航のサクララウンジに落ち着いた。

豪華な造りのサクララウンジはビジネスクラス以上の客しか利用できず、入室の際にベテラン接待係に搭乗券を示せば、搭乗時間が近づくと教えてくれるので、搭乗予定時間の十一時まで今朝読めなかった新聞をゆっくり読もうと考えていた。

部屋の中央には種々のスナック類とコーヒー、アルコール類が自由に摂れる洒落たテーブルや、個人的に電話がかけられる小部屋、窓際には仮眠がとれるようなゆったりしたソファなどがセットしてあった。

その頃になってようやく風雨が強くなりラウンジの窓から見える搭乗予定機が霞んで見えるようになった。ところが十時半になっても十一時になってもなお知らせもなく、ラウンジ内の掲示ボードには各フライト全て遅延と書いてあるだけである。どうせ台風だから出発が多少遅延しても仕方がないが、何時頃搭乗できるかくらいの連絡があっても良いのに。

暇に任せて秋山は自宅に電話をかけた。女房の節子はテレビの情報として台風が十二時半頃に房総半島に最接近すること、成田特急はじめ近郊の主要列車は運転を取りやめたこと、そして飛行機は全便欠航で再開の目途がつかないことを教えてくれた。

「こんなことぐらい空港のテレビを見ていれば判るでしょ？ あなたは成田でどうしているの？ 今となっては家に帰る手段はないわよ。まあゆっくりサクララウンジでくつろいでいらっしやいな」

他人事と思っていいい気なものである。仕事で外国に行くのに、いつも観光に行くと思っていないのだ。

亭主が災難に遭っても、「いい経験ができて良かったわね」くらいのことしか言えないのだから…。たまには「お仕事いつも忙しくて大変ね。身体には十分

気を付けてね」程度のことを言ってみたらどうなんだ？

午後一時頃になって風雨は一段と凄さをまし、ラウンジの窓から遠望できた搭乗機の姿も、全く見えなくなり、まるで夕方のような暗さになってきた。

この頃になってラウンジ内の飛行機の発着状況を知らせるボードも、全ての離着陸便がストップし、天候待ちであることを示していた。

シカゴとかシドニー行きとかの遠距離便の客には放送による呼び出しがあった、機内で昼食を用意した旨の放送があった。秋山は自分の昼食も順番に供されるだろうと予想していた。天下の日本航空のビジネスクラスの客だもの、それくらいは当たり前だ。

しかし、二時になっても三時になっても昼食の出てくる気配はない。入室したときはガラガラだったラウンジも足止めを食った客が押し詰め、暑苦しい空気が蔓延しはじめた。

秋山は固くなった肢体を動かすべく、ラウンジを出て空港構内の売店やカフェテリアを冷かし半分に覗いてみた。殆どの店で全てのメニューが売り切れでクローズの札が掲げてあった。僅かにオープンしている店先では長蛇の列で、なにやら整理券を貰うためだという。対象とするメニューは焼売弁当のみで、整理券を持っている人にも四十分後に支給するというのだ。

日本の誇る国際空港で、たかが焼売弁当を買うために四十分も並んで待つなどということは許されない、と秋山は思った。

サクララウンジに戻ると、一部の客はラウンジのサービスで置いてあるビール、ウイスキー、ウォッカなどのアルコール類と、煎餅、ナッツなどのおつまみを自分の席にしこたま運び込み、手近の机に山のように積み上げ、食べながら談笑している。

他の一部のグループ客などは朝から飲み始めたのでスッキリ出来上がってしまい、ラウンジ担当の女子社員に絡んでいる。

「きみ、台風で出発が遅れるのは、君の責任ではないことは判るけど、昼飯はどうしてくれるんだ？ それに何時ごろ出発できるかも教えてくれないじゃないか！」

「済みません。こんなことになるとは思っていなかったのです…。それにここは食堂ではないので昼食の準備はないのです」

「でも、大勢の客が空腹で待っているんだろう？ 君としてはどんなことをやろうとしているか言ってごらん」

まるで会社の新人教育みたいである。成田近郊から通っている新人の女子社員は律儀に答えている。

「はい、お客様のために至急対策を取っています」

「対策ってどんな？」

「はい、サンドイッチです」

「ほう、サンドイッチか、していつ頃来るんだい？」

「良く判りませんが、五時頃には…」

「遅いよ！ 成田から蕎麦かうどんの出前を取ってくれよ」

「俺たちの便はまだ欠航となっていないので待っていればいつかは飛べるよ。考えてみるともう五時間も飲みっぱなしだよな？ さあ、元気を出して飲み直すか？」

「今更家に帰るっていつでも方法がないよ。いってくるよってキスまでして出かけたのに」

「おい、出発まで相当時間がありそうだから、お前カラオケ屋でも探してこいよ」

「それにしても飛行機に乗る前にこんなに酔ったのは初めてだなあ」

しばらくすると、そのグループでは半分近くの人が居眠りを開始し、テーブルを片づけに来た女子社員の気配に眼を覚まして

「ママ、水をくれ」と声をかけている。新橋のスナックで呑んでいる夢でもみていたのか。

三時三十分頃になってラウンジの客にはサンドイッチの支給があった。台風はいよいよ房総地方を直撃の構え。千葉県の民家に被害が出始めた。東名高速の静岡ではトラックの横転事故があり、東京では山手線以外は全線ストップとの報が入る。

飛行機は離着陸の際の強い横風が苦手で、横風の風速が四十五KMを越えると国内の規定により離着陸禁止となる。降雨のため滑走路が滑りやすくなるとこの規制は更に厳しいものとなるのだ。

機長は各地の気象台からの最新の観測データや予測データを入力すると台風の進路、風の方向と強さ、雲の厚さ、雨の強さ、視界の変化などを予測し

て飛行計画を変更するという。十七時発の釜山行きはついに欠航となる。

井上課長は早出をして香港行きを選んだのは正解だった。彼の乗ったキャセイ航空機は定刻に成田を離陸し、定刻に香港に到着した。ところが香港ではジャカルタへ飛ぶガルーダ便が三時間遅れていると知った。

今朝早起きしたので待合室でウツラウツラしているのと、

「お客さん、飛行機が出るまでマッサージはいかが？」

と若いチャイナドレスの娘がやさしく起こしてくれた。白いしなやかな腕に食指が動き、どこでやるの、いくらと尋ねているうちに、ジャカルタ行きの便の搭乗案内が聞こえてきた。

「残念！ 飛行機が出てしまうので、ネクストタイムに」と言っただけ美人に別れを告げた。

ガルーダ機は遅れて香港を出発し夜の八時過ぎにジャカルタに到着した。

ジャカルタ空港は五年前に来た時とは見違えるほど大きくそびえてきれいになっていた。

ガランとした空港構内の入国審査のゲート前で、井上はどの審査官のところへ行くべきか注意深く観察した。

パスポートに弱みを抱えている彼は、入国できるかどうかは、審査官の心証如何によるとの旅行社のアドバイスに従って、ことさら慎重に審査官を見比べた。井上は最初から女性審査官は避けようと決めていた。

日本でも同じだが、女性は規則一点張りで融通が利かない。一度千葉でスピード違反で捕まった時も決して許してもらえなかった経験があった。

結局、井上は鼻下にチョビ髭を蓄えた、物わかりの良さそうなオッサン審査官にトライすることにして、恐る恐る入国証とパスポートを差し出した。

「コンバンワ！」

彼は日本人だと判ると精一杯の愛嬌で井上を迎えた。書類を調べながらも

などと無駄口を叩いていたが、パスポートの有効期限が四ヶ月しか残っていないと判った瞬間、急にたちあがって鉛の強い英語でまくしたてた。

「あなたのパスポートは完全ではない。あなたの入国は認められないので、次の便で日本に帰りなさい！」

余りの大声に周囲の人たちは何事が起ったのかと一斉にこちらを凝視し、井上は内心まずいなあとと思った。審査官は大声でこう言い切った後、片目をつぶりながら小さな声でこう言ったのである。

「アイ キャン ヘルプ ユー」

とつさに井上はかねて用意した日本の五千円札を一枚、持っていた本の下に隠しながら審査官の方へ突き出した。世界共通のアングラ且つ無言の商行為である。

審査官はそれを一瞥して、笑って受けとるかと思いきや、それを押し戻し

「二万円！」

と厳然たる態度で先方の希望価格を提示した。

シンガポールでの会議も無事に終了した。牢屋入りを免れた井上課長は帰国後社内的事後報告会の席上、秋山部長にこう頼み込んだ。

「ジャカルタでは、癩に障るけど敵さんの方が圧倒的に有利なので、入国の際にいわれた額を支払いましたが、場所が場所だけに領収書をもらい損ねました。

だから部長、今回の旅費の精算では、領収書のない出金伝票を切りますが、承認のサインをお願いします」

秋山は秘書の田島洋子が傍耳を立てているのを感じながら

「事情は判るが、会社としては外国の官憲への賄賂とも取れるような、領収書のない出金を認めるわけにはいかない」というリーズナブルな理由を述べ平然と拒絶した。

「何言っているんだ。会社だって日本の政界へは勿論、外国の有力官僚に、しかるべきことをしているではないか」と井上は反論したかったが、今回は泣き寝入りすることに決めた。二万円位なら、下手な秋山とひと晩麻雀をやれば、楽勝に取り返せる自信があったからだ。

「麻雀で勝つ一番の方法は、自分より下手な相手を選ぶことだ」と中国勤務の長い上野課長の口癖を覚えていた。

数日後、秋山部長の入院前日に井上がセットして四人が卓を囲んだ。この日は秋山が馬鹿憑きで、手ぐすねひいて乗り込んだ井上は役満を秋山に振り込むなど、秋山に名をなさしめる羽目になった。

思わぬ成果に気分を良くした秋山は、雀荘の出口で別れるときに井上にこう  
いった。

「井上君、今日のご苦労さん。麻雀で勝つには自分よりも下手な相手を選ぶこ  
とだと上野君が言っていたよ」

(了) 7562字